

野に建てる

山野すみれ

いちめんに輝く茶畑のなか
骨ばかりの柱が建つ
高いなあ
のぼりつめると柱は
私を支えかねて弧をえがく
時おり風がさらに曲げる

落ちはないさ

片手で支えながら

セパレーターを通しホムタイをいめる

御在所や鎌ヶ岳に何回もゆきが来て
霜に光る路を幾日もかよいつづけて
しだいに遠くが
見える高さまで築き上げる

銅管をあて くさびをうつ

おんなだからとか なれないとか

そんなあまえはゆるされない

くさびをうつ

生活を支え 私を支える

くさびを打つ

生命を支えるくさびを打つ

入道岳のふもとの村は
日暮時 いつものぐれた
雲が夜をつれてせわしくおりて来る
即席ラーメンの夜食をすませて
灯りをいくつもつけて夜業をする
背中に闇が おおいかぶさる

灯りのとどかぬはしで
私は釘を打つ
糸も墨も何もみえない
手袋をぬぐ
指の感覚をたよりに釘を打つ
私は釘を打ちつづける

つかれた頭の中でぼんやりと想う
だれかが言っていたなあ
歴史に残る寺院も塔も
何様でもなく大工が作るものと

型枠大工の私も
そんな一人になれるかなあ

時おり手もとが狂い指を打つ
顔をしかめて
私は又釘を打つ
深い闇にまぎれて
ただ釘を打ちつづける